

第1部

挨拶・趣旨説明 (13:00 ~)
話題提供 (13:10 ~)

宝が池の森・京都の身近な森の“今”をみつめる ～森の課題を知る～

ここ数年で、急激な変化を見せている宝が池の森。今、見えている森の変化は、これからの宝が池をどう変えてゆくのでしょうか？多くの人々に愛されてきた宝が池の森を保全するための方法を、異なる視点から考え、研究者の方々の見解を分かち合います。

話題提供

1 ▶▶▶ 宝が池の現在の植生とその再生への道

京都府立大学 長島 啓子

マツ枯れ、ナラ枯れ、シカの食害。宝ヶ池の森にとって、どうしてこれらが問題視されるのでしょうか？それは、これらによって、将来の宝ヶ池の森を形づくる樹木が育たない(更新しない)状況になってしまう可能性があるからです。同様な問題は日本全国にみられます。そして、それらの森を健全な森に再生させる動きが広がりがつつあります。宝ヶ池の森の現状をお話すると共に、自然再生の先進事例を紹介しながら、皆さんと共に宝ヶ池の森の再生への道を探りたいと思います。

●長島 啓子
京都府立大学(生命環境科学研究科) 助教
神奈川県出身。森林生態・景観生態学の知見を応用した持続的な森林管理に関わる研究に取り組む。地理情報システム(GIS)・衛星画像を駆使するとともに、現地調査による現場の状況把握を重要視。研究のキーワード:森林計画、植生回復、森林再生、生物多様性。

話題提供

2 ▶▶▶ 虫たちの世界と環境学習の視点からみる 宝が池の価値

京都工芸繊維大学 齊藤 準

宝ヶ池周辺の豊かな自然が残された里山に生息する多様な昆虫種を教育研究に活用することで、種の保存と彼らの生息環境の保全に取り組むプログラムを進めています。特に野生の絹糸昆虫である野蚕に注目して、その代表的なヤママユガ科の仲間の飼育と系統維持を行っています。現在、京都市産のヤママユをはじめ、シンジュサン、オオミズアオの系統化に成功しています。日本の固有種であるヤママユの保護活動を通じて、食樹となる寄主植物の植生や生息環境の保全にも積極的に取り組むことで、環境学習などでも地域に貢献しています。

●齊藤 準
京都工芸繊維大学(工芸科学研究科) 准教授
埼玉県出身。専門は昆虫生理学。カイコや野蚕の生理を研究する中で、野生の絹糸昆虫類の遺伝資源としての活用とその生息環境の保全の重要性を認識。京都市産ヤママユガ科の系統化を推進。2011年から「京都北山やままゆ塾」を組織し、環境学習などの活動を展開。

話題提供

3 ▶▶▶ 宝が池周辺に生息するシカが 森林に及ぼす影響と被害対策

京都大学 高柳 敦

京都市街北部では、2003年頃から深泥池周辺での目撃が目立ち始め、宝ヶ池公園でも近年、顕著な影響が急速に見られています。被害の激しい場所では下層植生が減少し、コバノミツバツツジの枝や幹が折られ、ヤブツバキの樹皮が剥がされています。このまま放置すれば、やがて公園の森は多様性が低くなり、景観としても価値の低い自然となる恐れが高くなります。シカの影響を抑えるには、捕獲と被害防除を組み合わせる必要がありますが、都市公園という場では、捕獲も防除もなかなか困難です。そのなかでどうやってシカのいる自然とつき合うのかを考えます。

●高柳 敦
京都大学(農学研究科) 講師
神奈川県出身。専門は野生動物保全学。1980年代から、大型野生動物による被害問題と保護管理のあり方について研究をしている。適切な防除の普及に努めている。京都府、滋賀県、福井県、兵庫県にて保護管理検討委員。食害防除ボランティア「かもしかの会関西」代表。

話題提供

4 ▶▶▶ 京都市域の野鳥の生息から生物多様性を考える

京都府立大学 福井 亘

京都市域には様々な生き物が見られます。その中でも「野鳥」は皆さんにとって、よく目にする生き物の一つです。もちろん宝ヶ池にもたくさん見ることが出来ます。様々な生き物の中で、鳥を見ることは、その生態系や生物多様性を探るきっかけを見出してくれるのです。なぜ、そこにこの鳥がいるのだろうか？あそこにいる鳥は何を食べているのだろうか？そういった疑問がその環境を探るきっかけを作ってくれます。鳥の声に耳を澄ませて、ゆっくり鳥を見て、その疑問を解きほぐすきっかけをお話たく思います。

●福井 亘
京都府立大学(生命環境科学研究科) 准教授
大手前大学史学研究所客員研究員
神戸市出身。都市や近郊農村での生き物(主に鳥類)とその生息環境について調査し、GISを利用しながら研究を進めている。加えて、ランドスケープ学としての視点から、庭園や景観についても研究に取り組み、計画や設計、デザインへ取り組んでいる。専門は、緑地計画学・景観生態学。

第2部

パネルディスカッション (14:45 ~)
グループディスカッション (15:50 ~)
まとめ・今後に向けて (16:50 ~)

人がかかわり森を守る・再生する ～宝が池の森育て～

毎年、春になるとたくさんのツツジが咲き誇り、濃いピンク色に染まる宝が池の森。美しい宝が池の森と共にくらしてゆくために、私たちはこれからどんな活動をしてゆけばよいのでしょうか？ディスカッションを通して具体的な目標へと迫ります。

パネル
ディスカッション

5 ▶▶▶ 宝が池の森のために、 今私たちが出来ることは何か

京都府立大学 田中 和博

森林管理の基本はアダプティブマネジメント(順応的管理)です。PDCAサイクルにしたがって、絶えず現状を見直し、改善を続けていく必要があります。今、宝が池公園の森林管理に必要なことは、虫の目から鳥の目に至る多角的な視点に基づく総合的な現状把握です。まず、現状をつぶさに見つめ、それらの結果を関係者の間で共有しましょう。つぎに、宝が池公園の未来について様々な考えや意見を聞き、自分が出来ることについて考えましょう。そして、宝が池の森を次世代に継承するために、改善行動に取り組みましょう。

●田中 和博
京都府立大学(生命環境科学研究科) 教授
兵庫県生まれの愛知県育ち。地理情報システム(GIS)を利用した総合的な地域森林計画について研究。著書に『古都の森を守り活かす』(共著、京都大学学術出版会)『森林計画学入門』(森林計画学会出版局)など。

みんなではじめる環境コミュニティ活動

アジェンダ21 コーディネーター 奥井 ゆうこ

生態系保全などの地球の環境問題の解決には、地域が一体となって取り組むことが大切です。この京都環境コミュニティ活動(KESC)プロジェクトは、京都の小中学校区を基本としたそれぞれの地域で、地域の事業者、学校、住民などの各主体が協力して取り組む仕組みづくりを目指しています。やってみたい活動の場を探したり、今後のビジョン等をお持ちの方との間取り持つお手伝いをしています。自分たちだけでは出来ない事を一緒に考え“活動”に繋げてみませんか？

●奥井 ゆうこ
京のアジェンダ21フォーラム・コーディネーター
京都市観光おもてなし大使
京都水と食くらしの研究所主宰
京都市左京区生まれ。サントリースクール等のセミナー講師を経て、サントリー「水育」プロジェクトに参加。水の大切さを伝える次世代環境教育「水育」で講師として全国の小学校でのテストランを実施し現在に至る。企業と学校、地域から、「水」「食」「くらし」「京都」「自然」「伝統文化」をテーマに、未来を担う子どもへ受け継ぐ事やその方法を模索する。

グループ
ディスカッション

座談会

ツツジ色に染まる宝が池の森を未来へ・・・

4つのテーブルに分かれ、それぞれのテーマにそった意見交換をおこないます。参加者全員で意見を出し合い、これからの活動につなげていきましょう。

Table-1	Table-2	Table-3	Table-4
グループづくりと 拠点づくり	環境学習・次世代を 担う子どもたちと共に	美しい風景と 森林保全	シカ対策と 森の再生

